

青森県佐井村箭根森八幡宮の玉類・石器について

—放浪の画家、蓑虫山人により明治期に描かれた玉ほか—

齋藤 岳¹⁾

Beads and Stone Implements Keeping at the Yanonemori Hachiman Shrine,
Sai Village, Aomori Prefecture
Takashi SAITO

Key words : 箭根森八幡宮、蓑虫山人、陸奥全国神代石并古陶之図、勾玉、翡翠、管錐穿孔痕、石偶、八幡堂遺跡

1 はじめに

佐井村の箭根森八幡宮は下北半島で古くから多くの人々の信仰を集めている神社である。明治11年(1878年)に放浪の画家として有名な蓑虫山人も訪れ、箭根森八幡宮の神宝の玉類を「陸奥全国神代石古陶之図」等に描いている。

青森県立郷土館は2008年に『蓑虫山人と青森 放浪の画家が描いた明治の青森』の展示を行い、その際に130年前に蓑虫がスケッチしたと考えられる箭根森八幡宮所蔵の玉4点のほか石器4点を借用・展示することができた(注1)。

それらは青森県の考古学史を考える上で重要なだけでなく、管錐での穿孔の痕跡を残すヒスイ(硬玉)製の玉など青森県内で他に類例をみない重要な資料を含んでいる。

そのため特段の取り計らいをお願いし、資料を図化することができた。そこで、本稿では、図に描かれた資料との対比を行った上で、資料紹介することとした。

2 箭根森八幡宮所蔵の玉・石器類の紹介

蓑虫山人の「陸奥全国神代石古陶之図」等土器・石器を描いた絵図は、六曲一双の屏風の大作で、青森県内に4組残されている。箭根森八幡宮所蔵の玉類については、いずれも構図は類似しており6点の玉が描かれている。うち2組は一番下に管玉が描かれ、2組は管玉が無いかわりに上から3番目に勾玉が描かれている。太田原慶子氏(太田原2008)の研究によると、それらのもととなったのが「明治15年以降(～20年)」に描かれたと推定されている「陸奥全国神代石并古陶之図」である。この図には、4組の図のうち、図によって有無が異なっている一番下の管玉と上から3番目の勾玉がなく5点の玉が描かれている。基本となった図として、より信頼性の高いものであるといえる。本稿では、この「陸奥全国神代石并古陶之図」で「下北郡佐井八幡宮神宝」として描かれた部分(図1)をもとにして、玉類の比定を行ったうえで図2-1～4で資料紹介することとした。上から一番目の勾玉については頭部が大きく、対応する玉が不明であるので、それを除いて二番目の玉から、図の上から順に記述する。図1と対比すると図2-2の玦状耳飾りが特徴をよく捉えているほか、比較的実物に忠実に描かれていると思われる。

図2-1は、メノウ製の勾玉である。縞模様上部にあり、極暗褐色である。大きさは、長さ3.3cm、幅1.9cm、厚さ0.9cm 重さ7.3gである。孔部の直径は0.2cmである。裏面の孔部付近に孔の貫通時に剥落により生じたと考えられる窪みがあり、正面側から穿孔されたと考えられる。C字形であり、頭部がわずかに大きい。

図2-2は、灰オリーブ色の玦状耳飾りである。図2-3と同様、蛇紋岩系の石材を使用しており、いずれも、ぬめりとした光沢がある。蛇紋岩帯に産する石材と考えられ、変成を受けている可能性もある。長さ6.2cm、幅3.1cm、厚さ0.5cm、重さ16.1gである。玦状耳飾りの左半分に相当する部分であるが、欠損後に上部・右側の欠損部分も、研磨により再加工されたうえで穿孔されている。孔部の直径は0.3cmであり、斜め方向に穿孔されている。孔付近には擦痕がみられる。また正面の孔部右側には、直径0.1cm強の小さな未完通の孔がある。

図2-3はオリーブ灰色の大珠である。部分的に色は暗緑灰色となる。長さ4.0cm、幅3.1cm、厚さ1.4cm、重さ30.2gである。孔の大きさは0.5mmで断面図にみられるように斜めに穿孔されている。

図2-4はヒスイ(硬玉)製の玉である。長さ3.4cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ14.7gである。孔部の直径は0.6cmである。正面左側がゆるやかにくびれる形状である。この玉で特徴的なのは、正面に直径0.6cm 深さ0.2cmの未貫通の孔が残り、孔の中央部が盛り上がっている点である。篠竹等を利用した管錐による穿孔の痕跡と考えられる。

図3-1～4の石器については、蓑虫の図に描かれていないものの、重要な資料を含んでおり紹介する。

図3-1は暗赤褐色の鉄石英製の異形石器である。長さ1.5cm、幅2.8cm、厚さ0.6cm、重さ1.6gである。正面中央

1) 青森県立郷土館 主任学芸主査(〒030-0802 青森市本町二丁目8-14)

上部や裏面中央部が赤青灰色に黒ずんでおり、焼けて熱を受けた可能性がある。

図3-2は黒曜石製の削器で、長さ6.4cm、幅3.6cm、厚さ1.3cm、重さ18.1gである。孔が貫通しているが加工によるものではなく自然のものと考えられる。孔部の直径は0.5cmである。

図3-3は緑色片岩製の磨製石斧で長さ4.5cm、幅3.9cm、厚さ1.0cm、重さ28.6gである。

図3-4は5箇所突起を持つ黒曜石製の左右非対称の異形石器である。長さ4.0cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重さ5.4gである。

3 紹介資料についての若干の考察

図2-1は、C字形であり、頭部がわずかに大きい形態やメノウ製であること、孔の貫通時の剥落痕を残す点などから古墳時代後期から平安時代くらいに島根県産のものと考えられる。その時代には松江市出雲玉造遺跡など島根県産のメノウ・水晶・碧玉製の玉が全国流通し、他の産地のものはほとんど見られなくなる事が知られている（勝部2006など）。青森県内では、八戸市丹後平古墳群やおいらせ町阿光坊古墳群など奈良時代の終末期古墳からよく出土している。また丹後平古墳群出土の碧玉製の勾玉・管玉は産地分析の結果、島根県花仙山産と判定されている（藁科2002）。

終末期古墳は、現在のところ下北地方では知られていない。箭根森八幡宮は多くの人々に信仰されているために①下北地方から転出した人が上北地方など他地域から得て奉獻した②より南方から下北地方に移住した人が奉獻したという可能性もあるが③下北地域から出土したものが奉獻された可能性があると思われるので、今後とも注意したい資料である。

図2-2は、玦状耳飾りであるが、正面左下が丸みを持つ鈍角となり、欠損しているが、頂部は弧状となるものと考えられる。本来は全体として縦長の隅丸三角形となるものと考えられる。断面は扁平である。福田友之（2006）は津軽海峡域における玦状耳飾りを集成し、本例のように三角形を基本とするものは縄文時代前期末葉～中期前葉（円筒下層d～円筒上層a式）に伴うとしている。そして、円筒下層d式には確実に伴うと述べている。

図2-3は縄文時代のものと考えられるが、図2-2同様、遠隔地の蛇紋岩帯からの搬入品と考えられる。

図2-4のヒスイ製の玉は未完通の管錐の穿孔を残しており、青森県内唯一の例（福田2004）とされ、貴重な例である。勾玉の初期の形とされるJ字形のものを思わせるところがある。縄文時代中期から後期前半の可能性が考えられる。少なくともヒスイ製の玉が勾玉や丸玉などとして定形化する後期末葉よりも古いものと考えられる。

図3-2は球顆が列状に入り、肉眼的にみて北海道赤井川産のものに類似する。時期は不明である。

図3-3は台形に近い小型の磨製石斧であり、縄文時代晩期などによく見られる形態をしている。横から見ると、層状に色調等が異なり、北海道日高産のものと考えられる。

図3-4は三角形の頭部をもち、縦に長い形態を持つことから弥生時代の石偶と考えられる。類例は図3-5～7に示したように、むつ市大畑の二枚橋遺跡や八戸市畑内遺跡例（福田2002）が知られ、八戸市是川中居遺跡例なども集成に加えられるようになった（斎野2005・鈴木2005）。また、八戸市松石橋遺跡の出土品は上部を欠失するが、頭部が三角形の石偶の可能性があり図3-8に掲載する。類似した形態の石偶は北方（北海道や千島列島）にも分布し、多くの研究者により、その関係性が考察されている（須藤1974ほか）。なお、図3-4は黒曜石製であるが気泡等の不純物をほとんど含まず良質であり、北海道産の可能性も考えられる。

さて、図2-1の勾玉は神宝として、わかりやすいものであるが、図2-2～図3-4は、より目立たない資料であるといえる。採集地点としては、遠隔地よりも佐井村周辺の可能性を想定しやすい。採取地点等の由来が不明であるため、出土場所等については不明であるが、箭根森八幡宮では、まわりの矢の根石を二つ拾うと神罰がくだるとされてきた（奥本ほか1971）ことをふまえて、最後に同社の位置する八幡堂遺跡から出土した可能性を検討してみることとしたい。図2-2は円筒下層d式期、図3-4は弥生時代の可能性があるが、これまでの調査（注2）では、両者の時期の資料は八幡堂遺跡から多数出土している。石偶については、頭部等の形態は異なるものの1995年の調査でも出土している（図3-9）。1995年の調査では3図1に類似した異形石器（図3-10）も出土している。その他についても八幡堂遺跡の営まれた縄文時代前期から弥生時代にかけての資料としても、不自然ではないと言えそうである。

4 おわりに

本稿で紹介した資料は、古くから人々から信仰を集めている箭根森八幡宮の神宝として大切に護られてきた重要な資料である。考古学的に見ても、明治時代前半に蓑虫山人の絵に描かれてきた学史上重要な資料を含んでいる。そればかりではなく、管錐穿孔の痕跡を残すヒスイ製の玉や、弥生時代の石偶、奈良時代前後の勾玉等青森県の考古学において非常に重要な資料であるといえる。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、箭根森八幡宮宮司の岩清水秀一様から特段のご配慮とご協力を賜りました。また、青森県立郷土館前副館長の福田友之氏から様々なご教示を賜りました。青森県教育庁文化財保護課の小笠原雅行氏からは三内丸山遺跡出土の块状耳飾りをはじめとして種々のご教示とご協力を賜りました。深く感謝いたします。

(注1) 藤沼ほか(2008)は「陸奥全国神代石古陶之図」に描かれた110点の資料の追跡調査を行い、亀ヶ岡遺跡出土の土偶等を確認している。当館の展示・展示図録掲載の写真により、さらに円覚寺所蔵の石棒等が保管されていることが明らかになったほか、福田(2004)によって管錐による翡翠穿孔例として言及されてきた箭根森八幡宮所蔵の玉が大切に保管されていることが広く紹介された。

(注2) 箭根森八幡宮は、佐井村誌によると(奥本ほか1971)、康平5年(1062年)、源頼義が安倍頼時、貞任父子の征討の後、下北に入り、矢の根石(石鏃)を多く止める場所に八幡宮を祀ったとされている。神社のまわりの矢の根石を一つ拾うのは許しても、二つ拾うと神罰がくだるとされてきた。八幡堂遺跡は箭根森八幡宮を中心とした舌状台地上の遺跡であり江戸時代末期に木内石亭が雲根誌(1973)に石鏃を紹介し、菅江真澄の『牧の冬枯』(1792)にも記述がある(岩本1971a)。正式な調査は1967年の調査からであり、その時の調査では縄文時代前期末の円筒下層d式から中期の榎林式の資料が出土し、特に中期中葉の円筒上層d~e式が多いようである(岩本1971b)。1968年の調査では、縄文時代晩期末から弥生中期資料が出土し、大洞A'式から砂沢式期の資料を中心に報告と分析が行われ、下北地方の縄文時代晩期終末から弥生時代前期に関する基礎的な資料となっている(安藤2009・大坂2009a・b)。1985年の調査では、縄文時代前期から弥生時代中期の資料が出土し、特に前期末の円筒下層d式が多いようである(橋1991)。1995年の調査では、縄文時代前期から弥生時代中期の資料が出土し、特に前期末の円筒下層d式から中期後葉の最花式までが多いようである(橋1997)。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1999『畑内遺跡Ⅴ』
青森県教育委員会 2003『松石橋遺跡』
青森県立郷土館 1984『青森県立郷土館特別展図録 蓑虫山人』
安藤広道 2009「八幡堂遺跡 1968年発掘調査の概要」『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』31~36 平成18~20年度科学研究費補助金(基盤研究(c))研究成果報告書 研究代表者 安藤広道
太田原慶子 2008「蓑虫山人と青森」『蓑虫山人と青森 放浪の画家が描いた明治の青森』4~7 青森県立郷土館
岩本義雄 1971a「佐井村と遺跡」『佐井村誌 上巻』1~3 佐井村
岩本義雄 1971b「八幡堂遺跡」『佐井村誌 上巻』8~30 佐井村
大坂拓 2009a「八幡堂遺跡出土土器の分析」『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』37~74 平成18~20年度科学研究費補助金(基盤研究(c))研究成果報告書 研究代表者 安藤広道
大坂拓 2009b「下北地域における初期弥生土器編年」同上 113~125
奥本静一・川合勇太郎・大石健次郎 1971「佐井八幡宮由来記」『佐井村誌 上巻』798~802 佐井村
勝部衛 2006「出雲の玉と玉作」『季刊 考古学』第94号 60~66
斎野裕彦 2005「東北における動物形土製品:四肢獣形の変容・消滅」『葛西 勵先生還暦記念論文集 北奥の考古学』303~336 葛西 勵先生還暦記念論文集刊行会
鈴木克彦 2005「石偶に関する研究—石偶, 異形石製品—」『葛西 勵先生還暦記念論文集 北奥の考古学』337~376
須藤隆 1974「青森県二枚橋遺跡出土の打製石偶について」『日本考古学・古代史論集』89~118 伊東信雄教授還暦記念会 吉川弘文館
橋善光 1991『八幡堂遺跡発掘調査報告書』 佐井村教育委員会
橋善光 1997『八幡堂遺跡発掘調査報告書(2)』 佐井村教育委員会
八戸市遺跡調査会 2004『是川中居遺跡 中居地区 G・L・M』
福田友之 2002「津軽海峡交流と弥生石偶—青森県畑内遺跡出土の石偶をめぐる—」『北海道考古学』第38号 79~90
福田友之 2004「津軽海峡域における先史ヒスイ交流」『環日本海の玉文化の始原と展開』131~142 敬和学園大学人文社会科学研究所
福田友之 2006「津軽海峡域における块状耳飾り—三角形・状耳飾りを中心にして—」『青森県考古学』第14号 9~30
藤沼邦彦・深見嶺・工藤清泰 2008「蓑虫山人の「陸奥全国神代石古陶之図」と青森新聞の「第二回弘前博覧会縦覧の記」について」『亀ヶ岡文化雑考集』79~104 弘前大学人文学部附属 亀ヶ岡文化研究センター
藁科哲男 2002「丹後平古墳群出土玉類の科学分析および原材産地分析」『丹後平古墳群』108~122 八戸市教育委員会



写真1 佐井村箭根森八幡宮所蔵の玉類・石器（左正面：右裏面）



写真2 図2-1の勾玉（正面）



写真3 図2-2の玦状耳飾り



写真4 図2-4の玉

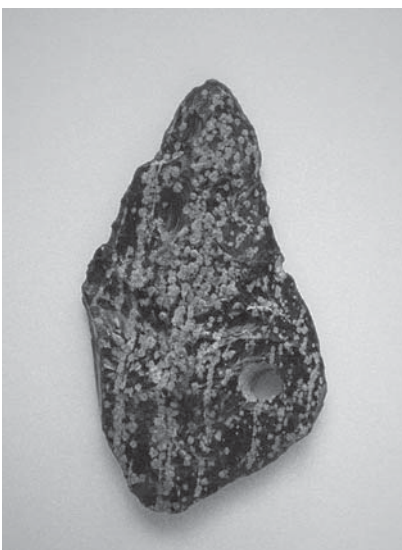


写真5 図3-2の黒曜石製石器



写真6 図3-4の石偶（正面）



写真7 図3-4の石偶（裏面）



図1 「陸奥全国神代石并古陶之図」の下北郡佐井八幡宮神宝の部分
 (青森県立郷土館 2008『蓑虫山人と青森 放浪の画家が描いた
 明治の青森』79頁より転載)

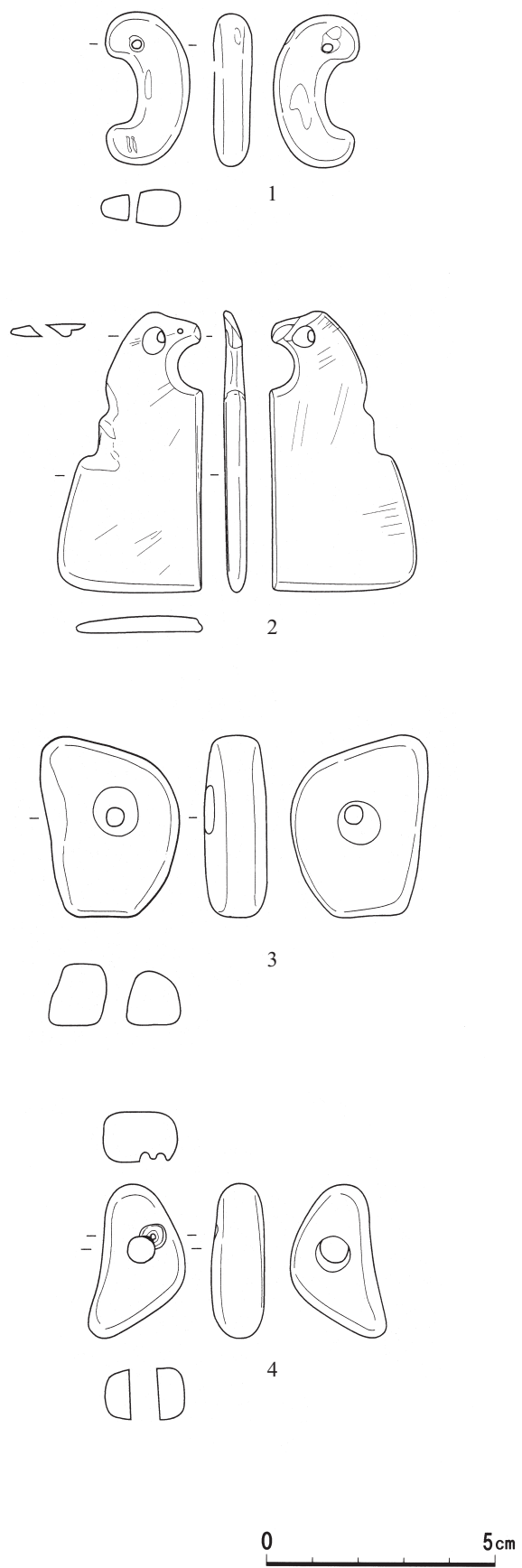
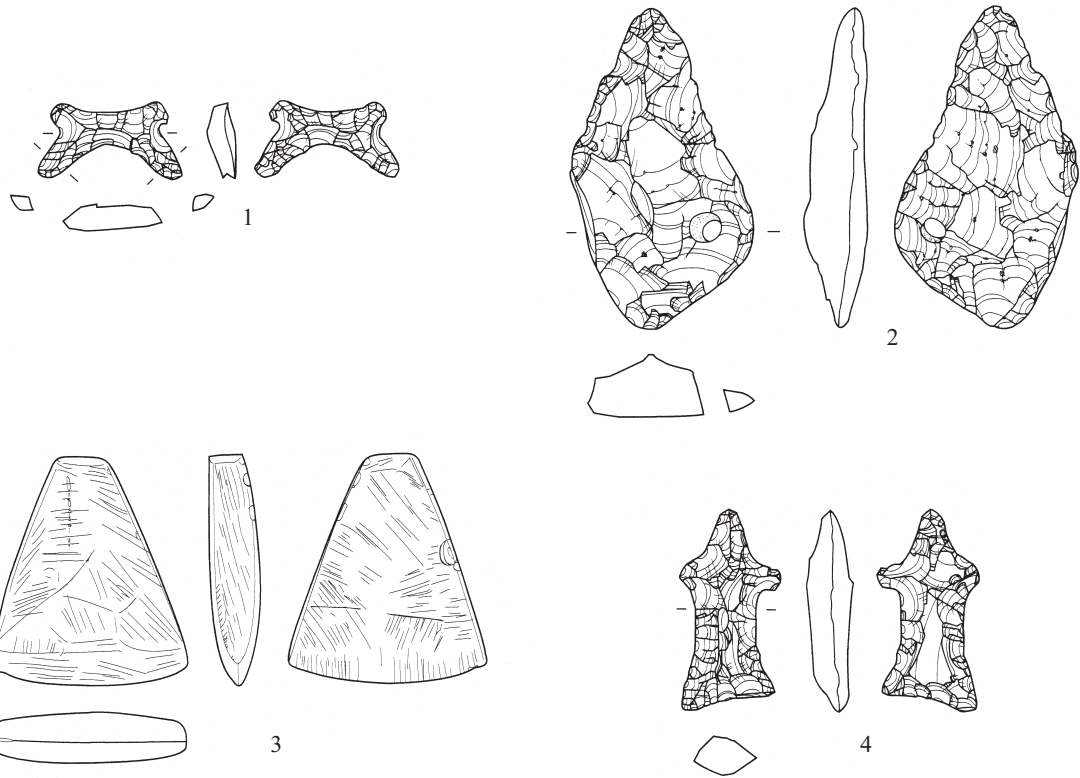


図2 箭根森八幡宮の玉類



(関連資料)

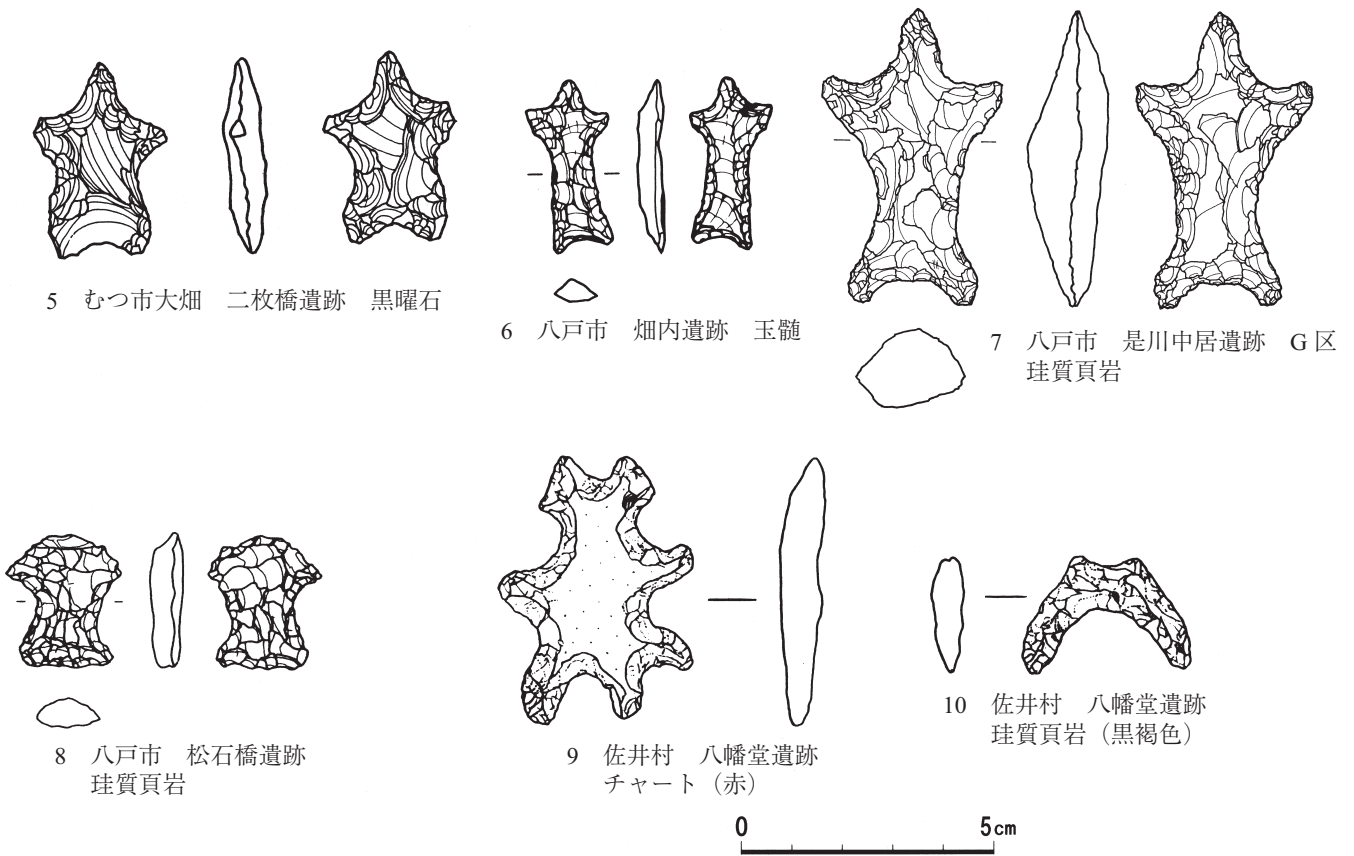


図3 箭根森八幡宮の石器及び関連資料